
WIN^{CONCORD} コンコード NEWSLETTER

国際的ネットワークに向けて

代表 磯野 英 徳

日頃は、WINコンコードに対し、一方ならぬご支援を賜りありがとうございます。WIN コンコードも無事二周年を迎えることができました。

この二年間で、50名の留学生を迎えることができ、すでに日本での新しい生活がスタートし、無事軌道に乗っています。皆様の暖かいご支援があればこそと心から感謝申し上げます。

WIN コンコードの活動が、これからも末永く継続していくためには、常に活動方針を考え直し、本当に留学生のためになっているか、自己点検していくことが大事であると考えております。

このような点から、母国へ帰国した留学生との交流をどうしていくべきかということを、そろそろ考えなければいけない時期に来ているのではないかと思います。帰国留学生同志、帰国留学生とWIN コンコード、帰国留学生と現役留学生との三つの交流が、特に重要だと考えられます。WIN コンコードの役割は、まず留学生の日本での勉強環境を整備刷るための援助をし、帰国してから和歌山でのすばらしい思い出を母国の人々に語っていただくということにあります。それを超えて、更に国際的な人脈作りにお役に立てればと考えています。現在地球上には、約50億人が生を受け、生活を営んでいます。その多くの人の中からたまたま縁があって、私達は、和

歌山に来られた留学生と親しくさせてもらっているわけです。この運命的な強い縁は、留学生同志においても、きっと当てはまると思います。そして、この縁を大切にすることは、お互いの将来においても大切でしかも価値のあることだと思います。

これらの交流の起点はWIN コンコードにあると思われますが、具体的にどのような活動をすべきか、まず、皆様からアイデアをお寄せ頂ければありがたいと存じます。ちなみに、私が今考えていることのひとつは、留学生名簿の整備です。帰国してから必ず留学生に現住所を報告してもらい、WINコンコードが、リアルタイムの情報を確保し、こちらからも機関誌を送るなどすることにより、帰国留学生と、常にコンタクトを取り合っていくことです。どこにどのような和歌山の仲間が生活しているか、帰国留学生にも知ってもらい、お互いに協力し合うシステムができればいいのではないかと思います。パプアニューギニアのポートモレスビーに、和歌山留学生会ができればすばらしいと思います。WINコンコードの誰かがフィリピンを訪ね、せっかく日本で学んだ知識を生かし切れない悩みを持つ帰国留学生に会い、相談にのることができれば心強いと思います。

いよいよ発足三年目を迎えますが、皆様のご支援を得て、WIN コンコードがますます発展できますようご支援お願い申し上げます。

WINコンコードの事業に参画して

顧問 海瀬 亀太郎

1992年はトヨタ自動車の工場見学・清水町での田舎体験・クリスマスのホームパーティー等々、WINの皆様方のお世話により数回に渡り留学生の皆様と共に過ごす機会を与えて頂きました。

家族を横浜に残し和歌山で一人で仕事をしている私にとって、青春時代にタイムスリップ出来る留学生の皆様と共に過ごせるこの機会は、とにかく仕事だけの無味乾燥なものになりがちな和歌山での生活に、心の潤いを与えてくれる素晴らしいひとときとなっています。

特に清水町や和歌山市の私の家にお集まり頂く時には、私自身も何かウキウキしている様子が電話を通じて分かる様で「何か良いことあるの?」と家族にも言われる始末です。

その様な私の様子を見てか大学1年と高校2年の息子達も時間があれば、是非参加したいと言っています。この素晴らしいチャンスを与えて頂いたWINコンコードの皆様方、又何時も明るい笑顔でお付き合いをして頂ける留学生の皆様感謝しています。

今年も出来る限りの機会を作り皆様と素晴らしい時間を過ごしたいと願っています。

特に田舎体験をして頂くために、昨年に加えて京都大学の林学部の教授にお貸ししていた家も、皆様にお使い頂ける様に空き家にしてお待ちしております。

未知の国

オットー ナカネル ケルア

(バブアニューギニア)

文明化から何百年もたった今日、誰もが生き延びるためにはお金が必要だと考えていることは明らかです。しかしそれは間違っています。宗教的理念や道徳的立場から一夫一妻制を支持している人にとっては驚きかも知れません。また、どの国も100以上の異なった言語などを持ち得ないと思っている人にとっては興味深いことかも知れません。アメリカやヨーロッパ、アフリカなどに行ったことのある人は、それで世界中の不思議をすべて見聞してきたというかも知れませんが、まだすべてを見たとは言えないのです。この“未知の国”はまだ多くの驚きをあなたの方のために用意してあるのです。

まず初めに、地理的な勉強をしておきましょう。世界地図を広げて“未知の国”の位置を見つけてみましょう。この国は南緯0〜14度、東経141〜160度のところにあります。この国の名前は各自見つけるとして、ここでは“未知の国”あるいは“その国”と呼ぶことにします。

その国の経済は二重構造となっています。現代的な市場経済と自給的経済で成り立っています。もし、経済や市場原理について学んだことのある人ならば、この経済の二重構造というのがどんなものかわかると思います。

国の1/3は、自給経済に依存しています。従ってお金を出すということは、ほとんど無意味です。人は、何事にも一切お金を支払うことなく何週間も生活できます。かと言って、食事や服も家もなしでという訳ではありません。これらは生存のための基本的必要条件なのです。これらを只ですませることが出来るのです。(サービスや品物を手に入れるのに支払いは不要という訳です。)厳密に経済的見方をすれば、これらの必要分は只ということにはなりません。

何故なら資源を使用可能な製品にする過程で労働が必要となるからです。その労力は埋め合わせされなければならないのです。しかし、支払いとは全く別の方法でなされます。労働の分配というのがあり、コミュニティのメンバーは（普通は家族単位ですが）社会全体に、直接的にもしくは間接的に有益な責任義務を割当てられます。現代の技術を少しばかり使えば、このシステムはうまく作用します。

このように、お金が全ての取引の仲介役となっている市場経済と共存しているのがこの国の人口の30%を支えているシステムなのです。

国土は 462km² と少して、そのほとんどは熱帯雨林で覆われています。山が多く雨季と乾季があり、気温は摂氏20~30℃です。

その国は、世界で最も美しく最も珍しい植物や動物の宝庫です。例えば、ある種の蘭や極楽鳥などが見られます。

その国は石油や鉱物などを含めて豊富な天然資源に恵まれています。魚類や森林、肥沃な土壌にも恵まれています。多くの多国籍企業にとって、この土地は正に“輝ける絶好のチャンス”を秘めているといえましょう。

しかしながら経済的な生産性を見ると非常に小規模です。1991年の GNPはほぼ30億米ドルですが、これは市場経済の部門の生産性にしかすぎません。自給的経済に於ける生産性は、お金の価値でそれを測定するすべはありませんから。

人口は 420万人程ですが、この国は言語学者の間では言語数の多さで有名です。彼らは 700以上の異なった言語を確認しています。それらは数千人規模の人々によって話されています。自給経済部門の人達は小さな部族ごとに住んでいます。そして彼らは各々文化的な特色を守って暮らしています。あまりにもたくさんの部族が住んでいるので“千の部族の国”とも呼ばれています。



セレモニアルハウス

19世紀の初めに、キリスト教が伝わる前、偶像崇拝をしていました。今日、全ての人々がキリスト教徒です。そして、カトリック教徒が人口の70%を占めています。しかし、いくつかの場所では偶像崇拝をしているキリスト教徒がいます。キリスト教徒は誰にも複数の配偶者を持つことは許していません。にもかかわらず、その国には複数の妻をもっている人もいます。

私の父には2人の妻がいます。5人の妻がいる男性を私は知っていますし、12人も妻のいる人についても聞いたことがあります。ふつう部族の長は5人程の妻を持ち、ふつうの男性は2~3人の女性と結婚します。この習慣の理由はたくさんありますが、ここでは二つの必要性を挙げておきましょう。まず第一にこれは富の証明のためです。男性は妻のために、多額の結婚支度金を払わなければなりません。従って多くの妻を持つということは、非常に多額の支度金を支払っているということになるので、これによりその男性の経済的ステイタスを誇示することになる訳です。そして次に、この習慣は社会保障のためでもあります。多くの妻を持てばそれだけ子供も多くなり、それによって高齢になってからも快適な生活が補償されるのです。この習慣はキリスト教が伝わるかなり以前から存在していました。キリスト教の教義である一夫一妻制を受け入れることは何世紀にもわたる国の伝統を捨てることになりますが、この国の男達はそう簡単にその伝統を捨てることができないのです。“古くからの習慣はなかなか抜けない”ということわざの通りです。

人々の間の争議は、たいていメラネシア人の方法として知られている方法で解決されます。よく統制のとれた法組織があるにもかかわらず、彼らは裁判所に赴くことはありませんでした。そのコミュニティの長や中心となる人物達が争っている者達の仲介をし、たいてい和解に至ります。その和解は、金銭や高級品をあげ渡しすることで促されます。多くの場合、悪いとされた側が多額の金銭を支払うのです。こうすることで争いの犠牲者を償われ、その争いで崩れた社会的関係を修復することができます。

私は、その国についてまだまだ説明したいと思いますが、書いて説明しても十分その国を知ってもらえるとは思いません。この未知の国への旅行を計画しいろいろな驚きを自分自身で体験してみたいかがでしょう。1995年以降でしたら、私が喜んで案内してあげられます。驚きを満喫できるでしょう。

(訳 山下 礼)

Land of the Unexpected

Otto Nakanel Kerua

(Papua New Guinea)

In this day and age, when civilization is centuries old, you are more than sure to think that everybody needs money for survival. You could be proved wrong. If you think that by religious principles and moral practices, a man can marry only one wife, you could be surprised. If you also think that no one country has more than a hundred distinct languages, you could be amazed. You may have been to America, Europe and Africa and conclude that you have seen all the wonders of the world. You have not seen them all. The Land of the Unexpected still has surprises in store for you.

First, let's study a bit of geography together. Get a world map and find the location of the Land of the Unexpected. This land lies latitude 0 to 14 degrees south and longitude 141 to 160 degrees east. You can discover the name of this land for yourself but here it will be referred to as the Land of the Unexpected or, simply, The Land.

The Land has a dual economy. There is the modern market economy and the subsistence economy existing side by side. If you have studied economics and market systems, then you will know exactly what this dual system is like.

Nearly one third of the population of the Land is dependent on the subsistence economy, thereby rendering money almost completely useless. One can survive for weeks without spending any money whatsoever. That does not mean that one does not feed, clothe and house oneself, however. These are basic necessities for survival, but they are available free of charge (one does not pay as one receives a service or goods). In a strict economic sense, these necessities are not free because labour is required to convert resources into useable



Ceremonial House

products. One's efforts must be compensated. Payment is made in a completely different manner, though. There is division of labour. Members of the community, usually the family unit, are assigned to specific responsibilities which are either directly or indirectly beneficial to the society as a whole. With a little help from modern technology, the system works.

Such is the system which supports almost 30% of the Land's population and which exists along with the market economy where money is the medium of almost every transaction.

The Land's area is just over 462 square kilometers with much of it covered with tropical rain forests. The terrain is rough. There are only two seasons, wet and dry and the temperature ranges from 20-30 degrees Celsius.

The Land is home to some of the most beautiful and the rarest plants and animals in the world, such as certain species of orchids and birds of paradise.

The Land is blessed with an abundance of natural resources including oil and minerals, fish, forests and fertile farm lands. To many multi-national companies, it is a land of golden opportunity.

It is, however, very small in terms of economic output. Its GNP in 1991 was approximately US \$3 billion, but this is only the output of the market sector of the economy. The output of the subsistence sector is not included as it is technically impossible to measure in money value.



Village People

The Land has a population of only 4.2 million but it is well-known to linguists for it's many languages. Linguists have identified more than 700 distinct languages, each spoken by several thousands of people.

The people in the subsistence sector live in small tribes each characterized by its own culture. There are so many of these tribes that the land is sometimes called the "Land of a thousand tribes".

Before Christianity was introduced to the Land in the early 19th century, the people worshipped idols. Today, all the people are Christians, with Catholics making up 70% of the population, but in some parts of the Land, there are Christians who still worship idols.

Christianity does not allow anybody to have two spouses. Nevertheless, men in the Land can marry more than one woman. My father married two wives. I know of men who have five wives and I've heard that there are even men with as many as twelve wives. Usually, tribal chiefs marry about five wives and most men marry two or three.

The reasons for this practice are many, but two need to be mentioned. Firstly, it is a show of wealth. Men have to pay a large dowry for their wives and marrying more means paying more, which indicates a man's financial status. Secondly, it is a social security measure. Marrying more wives means more children which guarantees a comfortable life during old age.

This practice has been in existence since well before the introduction of Christianity. To adhere to the Christian tenet of marrying only one wife would mean killing a centuries old tradition and men in the Land are not prepared to let that happen so easily. "Old habits die hard", as the saying goes.

Disputes amongst the people are mostly solved in what is known as the "melanesian" way. They never go before the courts although there is a well-established judicial system. Chiefs and respected members of the community mediate between disputing parties and a settlement is usually reached, which involves payment of cash and valuable goods from one party to another. In many cases the party deemed to be at fault pays a higher amount. This exchange of payments is to compensate the victims of the dispute and to renew the social relations which have been damaged as a result of the dispute.

I would like to discuss in more detail the specific concepts of the Land but written descriptions can never fully reveal a situation. Why not plan a trip to this Land of the Unexpected and be surprised for yourself? After 1995, I will be willing to give you a guided tour myself and you will certainly see and experience the unexpected.

マレーシアについて少しばかり...

モハメド・ハルン

(マレーシア)

マレーシアは、シンガポールのように世界中に知られていませんが、シンガポールの隣に位置していて、より正確に説明するならば、マレーシアは北方にタイ、南にシンガポールと隣接しています。

この機会に皆様に、この多民族社会である私の国を手短かに紹介したいと思います。

マレーシアでは、マレー系、中国系、インド系が主要なる民族で、様々な文化や宗教を持っています。私達の祖先は様々な起源を持っており、それ故に他国の人々にとって私達はマレーシア人と呼ばれているにもかかわらず、互いに顔のつくり、体系、皮膚の色などが異なっています。初めてマレーシアを訪れた人が、マレー系、中国系、インド系に囲まれて皆からマレーシア人だと自己紹介されたら驚いてしまうでしょう。しかし、これが真実なのです。

私達は、いろいろな文化や生活様式を持っていますがマレーシアでは何事も共有し合っています。つまり、日常、学校や会社で、又は隣人との生活で互いに影響を与え合っているのです。単民族社会ではない所で生活するのは確かに興味深いですし、おもしろいですが、同時にそれは、我慢強さや理解が不可欠です。私達のように多くの問題を抱えながら、平和に且つ調和のとれた国をうまく保っている多民族国家は多くはありません。とは言えマレーシアでは、平等な権利や扱いを受けていないという批判の声も聞かれます。もし皆様が、この熱帯雨林の国にいらっしゃれば、その実情を観察し判断を下すことができるでしょう。

私達の大臣は、三つの主要民族マレー系、中国系、インド系によって代表されます。その他女性も公平に大臣や副大臣として仕える機会を有しています。どのような団体にしても、それが公共のものであれ、

私的なものであれ、男性は女性も含めて民族集団も混同されてチームとして働いています。

文化の多様の違いのために、一つのマレーシア人の生活様式を説明することは、私にとって非常に難しいものです。しかし時間が過ぎて、世代間の交わりが成されるにつれて、三つの主要な民族はある種の文化を作り出してきました。例えば、機会ごとにオープンハウスを催して祝うこともそうです。もともとこの概念はマレーシアの町々のはずれに住んでいたマレー系の村人達のものでした。それは、親類や友達を含めた多くのゲストが招かれた時の行事なのです。そしてその客達は、招待者が用意してくれた食事をいただくことになります。

それは町に住む若者達によって広められ、今では皆に受け入れられています。オープンハウスのおもしろい点は、時々招待者自身が、何人の客が自分の家にやってくるのか前もって知らないこともあるということです。村々では時にこのようなことが起こります。食べ物、以前の経験から非常に大まかに見積もられ用意されます。

昔は招待状は村中に送られ、時にはずいぶん離れた村々まで広がりました。この行事をとりしきるのは大変で疲れるものですが、やはり満足感には代えられません。招待者は当日多数の客が戸口に表れると非常に誇らしい気分になるのです。

今やこの行事は村々から町へと広がり、マレー系の人々からマレーシア内の他の民族にも伝わりました。彼らは、これを新しい生活様式として認めましたが、勿論それぞれのやり方で実践されています。近代社会に於いて時間はとても貴重で、皆が自分達の仕事や日常の役割で忙しいです。そして、そうやって親類や友達のために手を貸すことが、オープンハウスに優先してきています。

村人達皆の協力で、オープンハウスが催されていた当時とは変わってきています。当時は、皆が村の誰かが催すオープンハウスの成功の為に自分の役割を担って貢献していたのです。



マレーシアではオープンハウスは一年中行われています。何故なら、様々な民族的祝い事や祭りがあるからです。1月には、在マレーシアの中国人達が彼らの新年を祝い、3月～4月頃にマレー人達が“HARI RAYA”や彼らの新年を祝う番です。そしてインド人は、10月に“DEEPAVALI”という彼らの“光の祭典”を祝います。12月にはクリスマスや、仏教徒にとっての（名前を忘れてしまったのですが）祝典があります。これらの主な祝い事の間に学校の休暇、マレー人の結婚シーズンなどもあります。

結婚式と、それに続いて新郎か新婦の家で催されるオープンハウスの招待状をたくさんもらい始めると、子供がいない人も、きっと学校の休暇が近づいてきているのだと知ることができます。

とにかく、休暇は5月、8月、11月にあり、結婚のシーズンやオープンハウスの時季もそれに重なります。カップルは、自分達の結婚の予定を学校の休暇に合わせようとします。そうすれば家族全員が式に集まることができるからです。普通結婚式は土曜日の午後か日曜日に行われます。それは働かなくてよい日だからです。休暇は三週間続くんらば、選択の余地は3回の日曜日しかなく、一日曜日につき三、四通の招待状がくるのです。

もし、学校の休暇に当たる時季にマレーシアで、村を通る道を旅するならば、一体いくつの結婚式が行

われているか数えることができます。何故ならその家々は他に簡単に区別がつくからです。その家は飾り立てられ、その敷地内は人々で混み合っているのです。それらの家々はオープンハウスを催しているのですから、そのチャンスを生かしてどの家に立ち寄るかを決め、昼食をごちそうになってみてはいかがでしょう。あなたを、とりわけ外国の人をどれ程歓迎してくれるかを知れば、さぞ驚かれることでしょう。

多くの招待を受けてしまったために、どの家に行くべきだったのか戸惑ってしまう可能性もあります。そして、あまりなじみのない新郎、新婦の顔を見て、初めて自分が間違った家に来てしまったと気付くことになります。私の友達もこのような目にあったことがあります。この場合一番大変なのは、その夫婦の親に渡してしまった結婚祝いを取り戻すことです。自分一人で買った贈り物ならばそのままにしておくこともできますが、友達と一緒に買ったものだったらその友達にどう説明すればよいのでしょうか。いずれにしても、少しばかり図々しくなると何か気のきいた言い訳で贈り物を取り返し、間違えて彼らの家に来てごちそうになったお礼として、いくらかのお祝いを置いてくるのが妥当でしょう。これは大抵、新郎、新婦となじみのない場合や招待状がよく知らない人から届いた場合に起こりがちです。

今日、オープンハウスは王、内閣総理大臣、大臣といった社会的地位の高い人達によっても催されます。普通、彼らはオープンハウスを元日に催します。その情報はテレビやラジオで流され、興味のある人は決まった時間内に彼らの邸宅に立ち寄ることができるのです。その機会に王や首相や大臣達と一緒に写真を撮る人もいます。

1994年、マレーシアは二度目の“VISIT MALAYSIA YEAR 1994”の扉を開きます。マレーシア市民の代表として、皆様をマレーシアに迎えるのを楽しみにしております。皆様が訪問できる場所がたくさんあり、生活費はずっと安いのです。マレーシアではあなたのお金はずっと価値を持つのです。

“VISIT MALAYSIA YEAR 1994”

(マレーシア訪問年 — 1994年)

Mohamad Haran
59, Jalan USJ 2/4P,
Subang Jaya,
47600 Petaling Jaya,
Selangor, Malaysia.
Tel:03-7340970

A Little Bit About Malaysia...

Mahamad Harun
(Malaysia)

Malaysia is not well-known throughout the world like Singapore. However, for the information of many, we are Singapore's next door neighbour. To be more precise, Malaysia is located between Thailand in the north and Singapore at the south.

I would like to take this opportunity to briefly introduce to you a country with a multi-racial community. The Malays, Chinese and Indians represent the three major races in Malaysia with varied cultures and religions. Our ancestors hail from different origins and therefore we are different from each other in terms of look, features and skin colour even though we are Malaysians to the rest of the world. A foreigner who visited Malaysia for the first time will be taken by surprise if a Malay, Chinese and Indian are placed side-by-side and introduced to them as Malaysians. But that's what we are and will always be.

We have differences in culture and lifestyle but we share almost everything in Malaysia.



We interact daily at school, office and live as neighbours at home. It is no doubt interesting and fun living in a non-homogeneous society, but definately it requires patience and understanding as well. Not many countries in the world with multi-racial backgrounds have succeeded in maintaining peace and harmony without much problem like we have. But you can still hear voices claiming that they have not been given equal rights and treatment in Malaysia. However, you can observe and judge it for yourself if you come to this lush green tropical country.

Our cabinet ministers are represented by the three major races comprising Malay, Chinese and Indians. A part from that, women are also given a fair chance to serve as ministers and deputy ministers in Malaysia. In all organizational set-ups, be it public or private, we have a mixture of racial groups both male and female working as a team.

It is quite difficult for me to describe in this write-up a truly exclusive Malaysian lifestyle due to the cultural difference we practise. However as time goes by, after

generations of mingling in, the three major races blend in certain cultures such as having the 'open house' to celebrate certain occasions, festivals and celebrations. Originally this concept can be traced back to the Malay Village folk settling down on the outskirts of the towns in Maalaysia. It is actually an affair where a large number of guests consisting of relatives and friends are invited by a family for a particular celebration or occassion. Guests are invited to a special meal prepared by the host.

This concept is becoming widely popular amongst the younger generation in towns and are now adopted by all races in Malaysia. The interesting part about the 'open house' is that sometimes the host himself does not know in advance the exact number of guests coming to his house. This is especially true in the villages. Food is prepared on wild estimates based on previous experience.

In the olden days, invitations were thrown around in the village and sometimes even extended to a few neighbouring villages. Managing the whole affair can be very tedious and tiring, but still it is satisfaction that counts. The host will feel very proud if the maximum number of guests turn up at his door on that day.

Now, this concept has travelled across from the villages to the towns and spread from the Malays to the other racial groups in Malaysia. They have adopted this as a new lifestyle but of course implemented in a slightly different way. In a modern society, time is very valuable and everybody is busy with their work and daily commitments to lend their relatives and friends a helping hand prior to the open

house. Unlike in those days in the villages, where the whole affair had survived on a true spirit of co-operation among the villagers themselves. Everybody played their part and contributed towards the success of the open house hosted by any village member.

'Open house' in Malaysia comes throughout the year because of various racial celebrations and festivals. In January, the Chinese in Malaysia celebrate their new year. When March or April comes, the Malays will take their turn celebrating their 'Hari Raya' or new year. The Indians celebrate 'Deepavali' their 'Festival of lights' sometime in October. In December, there is the Christmas festival and Buddhists celebrate their festival in (sorry, I forgot...). And between these major celebrations you have school holidays, a season of Malay weddings.

When you start receiving many invitation cards for weddings followed the open house hosted by the family of the bride or bridegroom then you can tell for sure that the school holidays are just around the corner even if you don't have any kids at school.

Anyway, the holidays fall in May, August and November and so are the wedding seasons and open houses. Every couple will try to fit in their wedding plan during the school holidays so that other family members can gather for the ceremony. Normally the wedding ceremony will fall either on Saturday afternoon or Sunday which is a non-working day. If the holidays last for three weeks then you only have three Sundays to choose from, and that explains why on one Sunday you have three or four invitations for weddings to attend.

In fact, if you happen to be in Malaysia during one of the school holidays, travelling any road passing several villages, you can start counting how many weddings are held. You can easily distinguish these houses. They will be decorated and crowded with people in its compound. Since the host is having an open house, you may grab this opportunity and pick your choice on which house to stop for a free lunch. You will be surprised to see how they welcome you, especially a foreigner.

There are times where because of the many invitations received, one might get confused over the right house to go to. In the end one might finish up going to the wrong house without knowing it until you see the face of an unfamiliar bride or bridegroom. This happened once to a friend of mine and the most difficult part of it is to get back the wedding present already handed to the father or mother of the couple. You can close one eye if the present was bought by you alone. But how do you explain it to the other friends if they too contribute to the present? Like it or not, you have to be thick skinned and find a smart excuse to get back the present from the host and replace it with cash for accidentally coming and eating at his house. This normally happens if you are not familiar with the family of the bride or bridegroom or the invitation comes from somebody whom you don't know very well.

Nowadays, open houses are also held by top dignitaries such as the King, Prime Minister and Cabinet Ministers. Usually they will have the open house on New Year's day. Announcements are made on television and radio and anyone interested may drop by at their residence at a specific time. Some guests will

take this opportunity to take photographs with the King, Prime Minister or any ministers hosting the event.

In 1994, Malaysia will open her door for the second time for the 'Visit Malaysia Year 1994'. On behalf of Malaysian citizens, I would like to welcome you all to Malaysia. There are many places of interest that you can visit and the cost of living too is much lower. Your money is worth much more in Malaysia.....

"VISIT MALAYSIA YEAR 1994"

Mohamad Harun
59, Jalan USJ 2/4P,
Subang Jaya,
47600 Petaling Jaya,
Selangor, Malaysia.

私のオモニ

金 美鏡

(韓国)

初々しい花嫁姿で今年も咲いてくれた桜を目にしなが、ふと思い出したのが20年余り一度も使ったことのない言葉「すみません」と「ありがとう」です。なぜあんなにも言いにくく、また言えなかったのでしょうか。

正直なところ、私は子供の頃、母が継母かも知れないと思込んだことが何度もあったのです。母はとても厳しい人でした。中学校2年の時、テレビも見せてくれなかったし、スカート以外は履かせてくれなかったし、漫画も当然読ませてもらえなかったのです。小学校の時は宿題を済ませるのを確認しながら、文字が綺麗じゃないということでノートを全部破られて、夜遅くまで泣きながら書き直したこともあり。その上、いつも母の友達の子供と比較

されては、随分肩身の狭い思いをしたことが今でも心の奥深く残っています。高校2年の時、母に図書館へ行くと嘘を付いて映画館へ行ったことがありました。初めての嘘だったので怖いながらも絶対ばれない自信があり私も「やった！」と喜びながら帰ってきました。

けれどその日から3日目に、自ら告白してしまったのです。嘘を付いたことをきつく叱られましたが、私は「すみません」とは言いませんでした。凄く反抗したかったし、本当に母が嫌だったので言えなかったのです。高校を卒業してから大学進学は自分が住む釜山ではなくソウルへ行きたいと思って一生懸命勉強しました。どうしても母と離れたかったし、普通の学生達みたいに自由に自分の意思で行動したかったのです。

ソウルでの4年間、母は毎日のように私のことを心配して電話してくれたり、月一度来ては身の回りの世話をしてくれました。そんな時でも私は素直に「ありがとう」とはいえませんでした。しかしこの年になって自分の人生を娘にそそいできた母の気持ちが少し分かるようになり、素直でなかった自分を反省するようにもなりました。

大学卒業後は高校の教師になりましたが、いつも嫌で嫌でたまらなかった母の小言が、全体的を得ており胸を突いてきました。また思春期の学生と接することの中から、人を育てる難しさを知りました。学生の為を思っていたアドバイスもなかなか聞き入れてもらえず、教師としての壁にぶつかったこともあり。やがて留学という名目で日本へ来て、再び学生として学問の道へ入った私ですが、相変わらず母の前ではわがままなことばかり言っています。

日本という外国の地でもうろたえず、挫折することなく、そしてしっかり自分の意思で目標に向かって行ける自分、そんな私でいられるのは厳しかった母のお陰だと思います。

「ありがとう。オモニ、カムサハムニダ。」

新入留学生紹介

大学院の部

・Milton Rajaratne スリランカ/経済

I, with my wife, have now settled in Wakayama, and we find the life in the new environment is more enjoyable. We would like to play games such as volleyball and badminton with you, to learn how to cook Japanese dishes, and also to exchange our knowledge in culture and language.

私は妻と一緒に和歌山に落ちつき、ここでの新しい生活を楽しんでいます。

私達は皆さんと一緒に、バレーボールやバドミントンなどをしたり、日本の料理を習ったり、文化や言葉について勉強したいと思います。

・Otto Nakanel Kerua パプアニューギニア/ビジネスマネジメント

I came from the island country of Papua New Guinea, south of the Pacific Ocean. My family joined me in February, and we are presently living in Kada. I have enrolled at the Wakayama Univ. Graduate school of Economics to pursue a Masters degree in Business Management. I hope to complete this program and return home in March 1995.

私は太平洋の南にあるパプアニューギニアの島国から来ました。2月には家族もやって来て、私達は現在加太に住んでいます。ビジネスマネジメントの修士号をとるために、和歌山大学大学院の経済学部に入りました。このコースを終えて、1995年3月に帰国する予定です。

・Aqustin Nunez アルゼンチン/経営

I was born in Buenos Aires, Argentina's capital city. I have obtained a bachelor of Political Science in the Univ. of Buenos Aires. I am doing a 2-year post-graduate course in Management, looking forward to getting a master in Economics.

I have recently got married, and my wife and I are enjoying our life in Japan, and more precisely here in the City of Wakayama, very much.

私はアルゼンチンの首都であるブエノスアイレスで生まれ、ブエノスアイレス大学で政治学の学士をとりました。今は経済学の修士号をとるために、経営を大学院で学んでいます。私は最近結婚し、妻と一緒に日本の、もっと正確にいうならば、ここ和歌山市での生活をとても楽しんでいます。

・Souissi Mohsen チュニジア/経済

In my country we speak both Arabic and French. I was born in an island in the South of Tunisia. That's why I like eating fish so much. And Wakayama is a sea side city. So I love Wakayama. Anyway the life isn't only 食べ物. Now my friend Micheal from Nigeria and I live in the country side. We'll give up studying. I think it's better to become farmers, isn't it? だいじょうぶ、じょうだんだけ...

私の国ではアラビア語とフランス語を話しています。私は、チュニジアの南の島で生まれたので、魚が好きです。和歌山は海に近いから大好きです。とは言っても、人生は食べ物かすべてという訳ではありませんが、... 今私はナイジェリア出身のマイケルと一緒に田舎に住んでいて、勉強はもうやめにしようかと思っています。だって農夫になった方がよさそうでしょう。...!?大丈夫ですよ。ちょっとした冗談ですから...

- ・Nicole Mpia Bakovui ザール/Marketing

私はニコルです。ザールから来ました。今、和歌山で生活しています。

- ・Didik Purwadi インドネシア/産業経営

インドネシア人は和歌山で私しかいません。和歌山の観光地へ行きたいです。

- ・程 少波 中国/経済学

和歌山大学院で経済政策を専攻しています。

学部生の部

- ・Mahd Lahadif Daud マレーシア

私は、6人の兄弟と2人の姉妹がいて、自分は6番目です。趣味はテコンドーの練習をすることです。今まで7年間続けてきて黒帯（一段）です。和歌山にテコンドーの道場があれば練習を続けたいと思っています。

I have 6 brothers and 2 sisters, and I'm the sixth. My hobby is practicing Tae Kwon Do. I have 7 years experience, and now I'm a blackbelt-first degree(一段). I hope I can continue practicing it if there are Tae Kwon Do classes here in Wakayama.

- ・ラタナジャビル マレーシア

私は日本へ来る前に2年間マラヤ大学で日本語の勉強をして、文系の学生でした。私には5人の兄弟がいて両親はビジネスをしています。今私はまだ19才ですが、7月26日にはたちになります。

マレーシアでの友達は、今日本中にばらばらいて、北海道から沖縄までいます。ここで私は一生懸命勉強して、日本人の友達をたくさん作って、日本語をべらべらにしゃべりたいのでよろしくお願いします。

- ・劉 彤 中国/教育学部 国際文化

私は一年半前に日本に来て専門学校で日本語を勉強しました。



アフリカに於けるエイズ

フランク エクツ ボンゼンバ

(ザール)

数年前アフリカでは、エイズの大きな被害が出つつあると考えられていた。全く、今の状態はどんなにひどいものだろうか。そしてこの状況は、他の国々にとって何を意味するのだろうか。

科学雑誌「Nature」の最近の報告によると、いくつかの都心部では、エイズは、今や成人死亡の主要原因であり、幼児の死亡の主な決定要因となっている。

従って、1991年10月に、ジンバブエの首都ハラレで会合した連邦政府の代表者に、アフリカに於けるエイズに関する不吉なメモが示されたことも驚きではない。いくつかのアフリカの国では、病院のベッド数の50～80%は(当時)エイズ患者で占められていたということが明らかにされたのである。

何故アフリカは、これ程迄に苦しんでいるのだろうか。ここで、アフリカ大陸でのエイズの蔓延を促進してきたいくつかの要因を検討してみよう。

・不特定多数との性交渉による伝染

今日、不特定多数の者との性行為が、アフリカにエイズを蔓延させている主な原因である。簡単に言えば、「性に関する規則が大きく崩れた」ということだろうか。伝染の典型的な経路は、売春婦に端を発している。売春婦が、多くの一夫一妻婚をとる女性に、相手を選定しない性交渉をもつ夫との接触を通してうつすことになる。世界の他の多くの地域と同様にとりわけ若者は、相手を選定しない性行為に走りやすい。

Alan Guttmacher Institute が1981年に出版した報告書によると「10代のうちに性的行為を経験しない若者は例外である」と結論づけられている。少年の80%、少女の70%迄が10代のうちに性的行為を経験しているという。南アフリカ共和国で、877名の若者を対象に行われた最近の調査では、75%が性的交渉を経験して

いるということが明らかになった。

・家族の崩壊

20代から30代の男性の多くが、妻や家族と遠く離れて都市の工場や鉱山、大農園であれ、輸送業務であれ、働くことを余儀なくされている限り、エイズの流行は続くであろう。

それから、内乱や政治的不和も要因に挙げられる。つまり、難民が多数生じる原因となるからである。エイズの専門家であるAlan Whiteside氏は「政治的戦争や内戦の起こる所では、社会的モラルの崩壊が生じる」と述べている。場所を移して生活している難民が、伝染の温床となるかもしれないし、そのうえ彼らは、より多くの性的パートナーを持ちがちなのである。

・医療上の問題

エイズの最も有力な伝染原因である輸血の実情を見直す人が多いというのも不思議でない。サウスアフリカメディカルジャーナル誌は、伝染した血液も蔓延をもたらす大きな要因であるとしている。そして、いまだに事実上、中央アフリカに於いては、血液の検査が行われず、提供される血液の少なくとも60%は感染していると付け加えている。

・罪のない人々の苦しみ

発展途上国では、HIVは女性にも男性にも数値上は、同様に影響を与えているが、女性への影響は男性へのそれと比べると、極度に苛酷であるとWorld Today誌は言う。このことは、アフリカには非常によく当てはまる。何故なら、そこでは文盲、貧困、季節ごとに仕事を求めて移動する夫などのために、ひどく不利な立場に置かれた女性達が静かに苦しんでいるのである。彼女達は、たとえ自分のことには責任を持っても、パートナーである夫が誠実でないかも知れないという危惧があるのだ。

実際、アフリカにそして全世界にエイズがある限り、妻や子供を含めて、罪のない犠牲者が苦しむことになるだろう。

今アフリカで起きていることは、世界に向けての警

告である。アフリカだけが、相手を特定しない性行為が手に負えない状況であるという訳ではない。地球規模の現象である。複数の性的パートナーを持つ人なら誰でもこの世界では危険に面しているのである。「もし、6年間毎年1人ずつ恋人を持ち、その恋人達も同じようにしているとすると、事実上は45000人と性的交渉を持ったことになる」K. E. Sapier博士によるこの単純な計算は、不特定多数の人を相手とする性交渉に潜在するエイズ感染の莫大な危険性を示している。このようにエイズの流行は、世界のどこにでも起こり得るのである。

エイズの起源や蔓延の責任を、ある特定の大陸や国民に負わせようとするのは、意味がなく無駄である。米国のミシガン大学の公衆衛生学部の学部長June Osborn 博士はそのことに関して「問題は、あなたが誰であるかではなく、何をするかである」と言っている。

耳のある人は聴きなさい。(マタイ11:15)

(訳 山下 礼)

AIDS in Africa

Franck Ekutu Bonzamba

(Zaire)

Several years ago it was thought that an AIDS catastrophe was building in Africa. Just how bad is it now? What does this mean for other countries?

"In certain urban centers", says a recent report in the scientific magazine Nature, "AIDS is now the leading cause of mortality in adults and one of the main determinants of infant mortality".

So it is not surprising that in October 1991 the heads of commonwealth governments who met in

Harare, Zimbabwe, were presented with a foreboding report on AIDS in Africa. It was revealed that between 50 and 80 percent of all hospital beds in some African countries were currently occupied by AIDS patients.

Why is Africa suffering so much? Let's examine some factors that have accelerated the spread of AIDS in the African continent.

-The Promiscuous Plague

Today's promiscuous sexual behavior is the main propagator of AIDS in Africa. Simply put, "sexual rules have largely broken down". The typical route that the infection follows starts with the prostitute. Female prostitutes serve to spread the epidemic to many monogamous women through contact with promiscuous husbands.

As in many other parts of the world, the young are particularly prone to promiscuity. One report published by the Alan Guttmacher Institute in 1981 concluded that young men and women who do not engage in sexual intercourse during the teenage years are an exception". Eighty percent of boys and seventy percent of girls claim to have had sexual intercourse during their teenager years.

A recent survey conducted among 377 young people in South Africa revealed that over 75 percent regularly engaged in sexual intercourse.

-Disrupted Families

As long as large numbers of men in their twenties and thirties are forced to work away from their wives and families-whether in urban factories, mines, plantations, or trucking routes-the spread of AIDS will continue unabated. Then there is civil war and political strife, the spawning grounds for millions of refugees. "Where there is political and civil war", observes AIDS expert Alan Whiteside, "there is

a breakdown in social behaviour...Refugees moving from one place to another may provide a pool of infection and they are likely to have more sexual partners."

-Medical Disaster

It is little wonder that many are taking a second look at the practice of transfusing one of the most virulent propagators of AIDS-blood! "Contaminated blood remains an important mode of spread", says the South Africa Medical Journal, adding that there is still virtually no screening in central Africa and at least 60 percent of donor blood is infected".

-The Innocent who suffer

"Although HIV in developing countries will affect women and men in roughly equal numbers", says the journal The World Today, the impact on women is likely to be...disproportionately harsh". This is especially true of Africa, where women-severely disadvantaged by illiteracy, poverty, and migrating husbands-suffer in silence. There is the fear that while they may be careful themselves, their partners or their husbands may not. In reality, as long as there is AIDS in Africa and, indeed, the rest of world, innocent victims, including spouses and children, will suffer.

What is happening in Africa is a warning to the world. Africa is not the only place where promiscuity is rampant. It is a global phenomenon:Every sexually active person in the world with more than one partner is potentially at risk.

"If you have 1 lover per year for 6years, and so do all your lovers, you will virtually have had sexual contact with 45,000 people". This simple calculation by Dr K. E. Sapire, illustrates the enormous potential for AIDS infection that

exists for the sexually active, thus spreading the epidemic elsewhere.

Trying to pin the blame for the origin and spread of AIDS on any particular continent or national group is pointless and futile. Dr June Osborn, dean of the School of Public Health at the University of Michigan, U.S.A. put it bluntly: "It's not who you are but what you do."

Let him that has ears listen. (Matthew 11:15)

「オットーファミリー 加太へようこそ」

磯野幸美

バブアニューギニアから来られ、和大学の大学院で留学中のオットーさんが御家族を呼び寄せ、加太の我家に住み始めてもうすぐ三ヶ月になります。実は、加太の家は20年近く行事の時や夏の海水浴シーズンの時に出かけて使うくらいで、空家になっていました。久しぶりに住人を迎える事になったのです。

南国のバブアニューギニアから真冬の日本へ（しかも二月）さぞかしとまどっている事でしょう。加太は海に面しているので、人々はとても開放的です。さっそく、近所のおばあちゃんが初物のヒジキを持っていったのか、。きっと黒い、えたいのしれない食べ物に面くらった事と思います。寒い寒いと奥の部屋で石油ストーブをがんがん燃やして、その部屋だけはまるでバブアニューギニアのようです。「オットーさん！」と声をかけると、ノースリーブや夏服姿の三人のかわいい女の子達が飛び出して来てくれます。見ただけでこちらは震え上がってしまいます。冬物の衣料を集めて渡しているのですが、きっと着慣れていないので着心地が悪くいやがるのでしょうか。

留学生との思い出

松島 啓子

あるとても寒い日のことでした。

門のベルが鳴り、戸を開けると一人の留学生が立っていました。彼女は、少し目に涙を溜めていたように見えたが、それは寒風のせいだろうと私はその時あまり気にもしませんでした。

「お邪魔してもいいですか」と彼女は控えめに尋ね部屋に入ってきました。「こんなに寒い日にどこへ出かけていたの」と聞くと「ええ」と答えるだけで少しいつもと違う彼女の様子に「何かあったの？勉強に疲れたのかな」と冗談っぽく言って「これから夕飯の準備をするので手伝ってくれる？」とそれとなく誘うようにしてキッチンへ行きました。

私はこの時、彼女の周辺で何かが起こったことに気付いた。が、あえて尋問するようなことはさげようと思った。彼女は「松島さんはいつも元気ですね。そしていつも笑っていますね」と言ったので「そう？ そうでもないのよ。もう年寄りだから体力もないし、忘れっぽくなるし、あなたのような若い人が羨ましいわ」と取り留めのない会話が続いた。しばらくして彼女の気持ちちが和らいできたころ、今友達関係で悩んでいる事を話し始めた。私は、彼女に何をどう答えてあげればよいのかわかりませんでした。とにかく話しだけは聞いてあげようと思った。そして話しを聞いているうちに、彼女の人情味あふれる人柄が言葉の端々から伝わってきた。

食事が済んでテレビを見はじめたころ、彼女の顔には数時間前のあの寂しげな様子は薄らいでいた。私は、心の中で「よかった」と安堵した。実際の所、彼女の気持ちをどれほど慰められたかはわかりません。しかし、マンションでひとり思いつめているよりは、少なくとも誰かに話したことで、心のわだかまりが解けたのではないのでしょうか。



ちょっと落ちついた一ヶ月後、真ん中の三才の女の子が腸にくる高熱が出るカゼにかかり、入院してしまいました。頼りのオットーさんが病院で子供さんに付添い、加太の家には日本語がまったくわからない奥さんと子供二人が残されました。となりに姉の家族が住んでいるのですが、英語を話すのが苦手な姉と奥さんとのコミュニケーションは絶妙です。

「子供の様子を見たいだろうし、奥さんを病院に連れて行ってあげたいと思うので、身振り手振りで“My car go.”と言ったけれど通じているんやろうか？」と私の所に姉から電話がありました。

私の頼りない英語で、もう一度説明するときちゃんと通じていて、結局変な文を作って言うよりは単語を並べた方が誤解が少ないと感心しました。

長ーい、長い（一週間ばかりでしたが）入院生活も終わり、無事退院してホッとしています。

まだ寒さに慣れていないので、カゼをひくといけな

いと言って、桜の花見もおあずけでパプアニューギニアのような奥の部屋に籠もっているそうです。早くニューギニアと同じくらいの気温になり、加太の生活を大に楽しんで頂きたいと思います。

こんなことがあって以来、私は以前にも増してWINのメンバーになれたことに喜びを感じています。お陰で今では多くの国々の留学生との触れ合いが、私自身そして又、家族みんなの生きがいのひとつにもなってきました。

2年前のある新聞で、WINのことを知りこの会に入会したことで以前の平凡な日々に変革をもたらし、充実した生活を過ごすことになりました。

メンバーの皆さん、留学生の皆さん、心と心のつながりを密にし、国境のない人間同志の友情を深めましょう。

夏のキャンプ

ノルシャム・シャザリ

(マレーシア)

去年8月1～2日、和歌山大学の留学生とWINコンコードの何人かのメンバーは清水町へキャンプに行きました。日本に来てから初めてのキャンプで、いろいろな国の人が集まって、遊んだり、話し合ったりして、楽しい二日間のキャンプでした。初日、海瀬さんが住んでいた家に着いて、近くの川で一緒に

お弁当を食べました。その後、後藤さんと釣りに行こうかと思いましたが、アスリとトニーが楽しそうに泳いでいるのを見て、釣りをやめて一緒に泳ぎました。川の水が冷たくて本当に気持ち良かった。

午後、日本の伝統的な紙作りを見に行きました。作り方を見てから、皆それぞれ自分の紙を作ってみました。バーベキューが終わった後、皆川の近くで花火をやりました。そしてまだ眠くないトニーと朴さんと近くの川へ行行って三人でキャンプファイヤーをして歌ったり、話したりしました。トニーが「私は出来ない...出来ない...」と言いながら上手に歌いました。朴さんは声が本当に良いので、和歌山演歌フェスティバルに参加したら優勝するかもしれません。

次の日、昼ごはんにはおいしいカレーライスを食べながら帰りました。今年の夏もまたどこかでキャンプしましょう。

勉強の目的で日本に来て、机に向かって勉強することばかりではなく、出来るだけいろいろな活動に参加して、日本人と交流していくことも大事だと思います。WINコンコードが留学生と日本人をつなぐ架け橋として、これからももっと発展するように祈ります。



「留学生の店」

汪 易

(中国)



去年11月22日、和大祭の時、和歌山大学の留学生たちが「留学生の店」という名の模擬店を出しました。みんなの努力と WINコンコードの協力のおかげで、とても成功しました。これを出す目的は WINコンコードの磯野代表のおっしゃったように「料理を通じて交流を深める」ということでしょう。

普段忙しい留学生たちが、この日のためにみんなで準備し、作り、手伝いをして和大で初の留学生の模擬店を開いたのです。この度、中国、タイ、スリランカそして韓国、4か国の料理を出しましたが、大勢のお客様が来られ、売り上げも8万円に達しました。

そして、このお金で和大留学生の活動を一層活発にさせるでしょう。今年は、もっと多くの国の料理を期待できそうです。

Christmas Party

Parichat Kanchanavareerat

(Thailand)



The Christmas party at Mr. Kaise's place was one of the most enjoyable home parties I have attended in Japan.

It was December 23, 1992. Most of the foreign students were picked up by Mr. Goto and Mr. Kosaka at the Shi-eki. When we arrived, almost everything was ready. Fourteen of us (ten foreign students and four Japanese) started the party with the usual KAMPAI. Most of the food was prepared by Mr. Kaise. There were roast Turkey, barbecued spare ribs, prawns in chilli sauce and many others. Some traditional Japanese food was also brought in by Mr. Goto. All the food was very delicious! Everyone ate to their hearts' content, I supposed. Naturally, the fourteen people slowly divided themselves into smaller groups of two to four. Each group chatted about the topics concerning them.

After the delightful dinner, there was a Christmas cake provided by Ms. Nakatani. It was quickly divided and savoured. Then, there were the games invented by Ms. Nakatani. Whoever wins got a Christmas present. Everybody got so excited that I was sure we made too much noise. However, the games were played for so many rounds that almost everyone got at least one present. What amused me most was a Chinese student who tried to act as if he were the master of the game at a casino.

And at last, it was time for Haagen Daz ice-cream, sponsored by Mr. Kosaka. It was a cake-shaped ice-cream.

We left Mr. Kaise's place happy and contented. Thank you everybody for having made the party such an enjoyable one. Special thanks is extended to Mr. Kaise for his kind invitation, his delicious dishes and his beautiful place. Thank you very much.

一年中の最善の日

王 志 敏

(中国)

1月19日と20日は私にとって、一年中の最善の日でした。なぜかという、8ヶ国19人の留学生と家族と一緒に富士通明石工場を見学したり、滋賀県の琵琶湖パレイでスキーをしったりしたからです。

私は見学と旅行が大好きで、日本に来る前によく国内で旅行をしていました。そのため、私は旅に慣れています。けれども、今回はわくわくして前夜に寝られなかった程です。夜に何度も目をさまして、家内に「今何時?」と聞くと、「まだまだよ」と言われやっと落ちついて寝たら「ピー」と目覚ましが鳴って飛び起きると朝でした。家は堺市にあって、和歌山市民会館前に行くためには朝一番の電車に乗らないと間に合わないからです。5時に、まだ寝てい



る息子を抱いて、三国ヶ丘駅へ走りだしました。難波で趙鶴鳴君と会い、6時2分発の急行和歌山行き電車に乗りました。

7時10分ごろ市民会館前に着くと、小坂さんを初め会員の方々が私たちを待っていました。1月の朝は寒いけれど皆様の笑顔を見て、心に暖かいものが湧いてきました。

11時半ごろに富士通明石工場に到着しました。富士通は世界で2番目のコンピューターの大手メーカーであり、このようなハイテク企業の見学は初めてです。明石工場は1940年に開設、現在コンピューター周辺装置を中心に、多層プリント基板、ディスプレイ部品を作っているそうです。

12時30分、概況説明。担当者はさすがに英語に堪能で、留学生とスムーズに交流できました。留学生の大部分が初めてこのようなジャパニーズ・スタイル・マネジメントの特徴を備えた会社を見学しました。そのため見学後の質問では、普段経営学を勉強研究する時、理解しがたい現場の実情を聞き、本から学べないことが勉強できました。

2時30分、記念写真を取ってからバスに乗り京都に向かいました。汪易君はカラオケが大好きで、バスの中で留学生たちが自国の歌を歌っているうちに、京都嵯峨ホテルに着きました。夜の懇親パーティが終わって、お借りしたスキー服を選びに行きました。



みんな皆様の思いやりを感じ、感謝を込めてメッセージを書きました。

翌朝、琵琶湖バレイへ出発しました。私は中国の東北地方ハルビン市から来ましたがスキーは初めてです。スケートが上手なので、スキーもすぐにできるかなと思っていました。1時間ぐらいでスキー教室が終わりさっそく挑戦しようとしたのですが、空腹で、まずレストランに行きました。食後、趙さんとスキーに出掛けました。スケートが出来るからか私はすぐにスムーズに滑れました。何回も大回転、小回転をしてとても楽しかったです。「あの高いスロープに挑戦してみませんか」と趙さんに言われ一緒にいきました。しかし、滑って降りたのではなく、転んで降りました。やっぱり初心者でこのコースは無理だとあきらめて、元のコースに戻り熱中して滑りました。あっという間に4時を過ぎました。

日本は交通機関が良いけれど、家に帰るともう9時すぎでした。

今回の旅で私たちはハイテクの大企業を見学したり、体を日常の緊張からリラックスさせたり、大変有益でした。

私は今回の旅を提供してくれた WINコンコードの皆様 に心から感謝致します。ドイツの詩人ゲーテが「涙とともにパンを食べた者でなければ人生の味はわからない」と言いました。今回の旅は私にとって「パン」のようなもので、とても良い経験でした。皆様、ありがとうございました。

1992年度活動経過

- 4月 6日 花見(根来寺、緑花センター)
- 5月16日 第2回総会及び交流会
- 6月 7日 ホームパーティ(中筋様宅)
- 8/ 1~2日 サマキャンプ(清水町海瀬様宅)
- 9月13日 月見会(和歌山城)
- 10月31日 WIN インターショナルパーティへ参加
- 11月22日 大学祭「留学生の店」に協力
- 12月23日 クリスマスホームパーティ(海瀬様宅)
- 1月 2日 新年会ホームパーティ
- 1/ 19~20日 企業見学(富士通明石工場)
- 3月18日 帰国生送別会ホームパーティ
- 2~4、10月 入居、転居、その他

アグスティン、オットー、ミルトン、モセツ、マイケル、ラナ
シャム、ベゾワワ、バリシャット、ジョシ、岳小妹

上記の活動の他、会員の皆様に留学生の
ホームビジットを受け入れて頂きました。

ベンジャワン・ニムマーノン

(タイ)

大阪外大で6ヶ月間の日本語コースを終えた後、1991年4月に私は和歌山大学の大学院で学ぶために、和歌山へ越ししてきました。私の修士課程には3人の日本人と6人の外国人学生がいました。ハンガリー出身のカロイさん、チュニジア出身のタレックさん、スリランカ出身のウィラーさん、ベトナム出身のトウイさん、フィリピン出身のジョシーさん、そしてタイ出身の私というわけです。

私が和歌山に来たその日に、私の先輩のワッシャラーさんと親しい小橋さんが、ふとんや机、椅子、洗濯機といったここでの生活に必要なものをたくさん私の部屋へ運んできてくれました。その数日後、ジョシーさんと私の部屋にTVセットを取り付けに来てくれた中谷さんと村上さんに初めて会いました。そしてもうひとつ絶対に必要なものといえば電話ですが、私達が電話を持てるように手を尽くしてくれました。今、最初の6ヶ月間ほとんどの時間を神戸で過ごしてしまった事を後悔しています。和歌山の人達の優しさを痛感してはいたのですが、それでも初めて一人で住むというのは淋しかったのです。

私の後輩のバリシャートさんが、1991年10月にやってきました。谷口さんは、彼女自身とても忙しい身でありながらも勉強机や洗濯機を運んできてくれ、それらを4階にある部屋まで運び上げるのを手伝ってくれました。そして私に、今使っている、そして日本で過ごす一番最後の日まで使うつもりですが、自転車をくれました。

WIN が2年以上に渡って積極的に行っている活動の中に、留学生に必要なものは出来る限り準備するということがあります。3月と10月に新しい留学生が来るので、生活用品を集め倉庫に入れたり、それらを学生の部屋に届けたりで大変忙しくなります。3

月の卒業シーズンには引っ越しのお手伝いもあります。それに加えて6ヶ月の日本語講座ではあまり歯が立たない不動産屋さんとの交渉も手伝ってもらいます。

5月に行われるWIN CONCORD のパーティには留学生は皆招待されます。この機会にたくさんの人々と知り合うことができます。バリシャートと私は栗山さん一家と知り合いになり、彼らのヒッポファミリーの活動を通じて、山路さんという素敵な一家とも知り合いになりました。この地を初めて訪れる留学生達がたくさんの友達を得て楽しい時を過ごせるのです。ホームパーティもしばしば行われていて私も何軒ものお宅に伺いました。

日本を旅行することはお金がかかるといわれていますが、少なくとも2回気分転換を図るチャンスに恵まれています。夏には、海瀬さんの生家で本格的なカントリーライフを満喫できました。海瀬さんは実業家として成功されているだけでなく料理の腕前も素晴らしい方です。1月の終わりには、学位論文を終えた2年生達を中心に、トヨタや富士通のような興味深い企業等への見学旅行があります。そしてその時にはスキーをすることもできます。留学生のほとんどが暑い国から来ているので、スキーができるというのはすごい楽しみです。

1992年11月に新しい行事がひとつ加わりました。学園祭への参加です。私達は各国自慢の料理を売り物に留学生の屋台で参加しました。スリランカ、中国、韓国、タイのお国料理が並びました。そして売り上げは今後の活動に使われます。参加者はみんなとても疲れたけれど良い経験になったし、何よりもとても楽しめたと思います。

WIN の活動はたくさんありすぎてここに全てを挙げることはできませんが、バンコクに帰る前に私の心からの感謝の気持ちを、WIN CONCORD のメンバーの方々に伝えたいと思います。この感謝の気持ちを忘れずに私達のこの世界がより住み良いものになるように頑張っていきたいと思います。

WINコンコードアルバムから



WINコンコード設立趣意書

現在社会は、政治・経済・文化のすべて分野で、地球を一つの単位として捉え、はじめて、その機能を十分に発揮しうる状況に至っていると思われます。そして、このかけがえのない地球の責任を担っているのは、たった一つの「種」に留まる「ヒト」即ち人間であり、その一人一人の人間が確立された個として、地球の貴重な構成要素としての役割を果たすことが求められています。民族の違いは、多様な文化の豊かさを示すにすぎず、国境は行政を効率的に行うための境界にしかすぎないのです。

WINは、人間の知恵を結集し、愛すべき郷土和歌山が、人間味溢れるネットワーク（HAN Human Active Network）で結ばれた、活性化された地域となるために活動するものです。そして、世界各国から勉学の間を求めて留学して来る人々に、より良い環境を整えることは、ひとつの単位となった地球上に「HAN」を構築するうえにおいても重要なことであり、これにより、地球のひとつの地域である和歌山が、世界とダイレクトに結びつき、和歌山の優れた文化が世界に紹介され、地球の多様で豊かな文化環境の醸成に寄与できるのではないかと考え、我々は、WINコンコードを設立するものです。

WINコンコード事務局

〒640 和歌山市大谷264-21

TEL 0734-52-7474 FAX 0734-52-6050